若越郷土研究
32の3

グリフィスと白山
―日本は海のスイス―

山下　英一

一　何がグリフィスを白山へ引き付けたか

明治四年八月二十三日から二十四日の両日にグリフィスは白山に登り下山している。それはグリフィスが明治四年三月四日に福井の町に着いてから、明新館で理化学を教えて半年たった夏休み（八月十四日から九月二日までの三週間）の或る日のことであった。このとりたててどうということもないと思われる一外国人の山の旅をいま何故、問題にしようとするのか。しかし考えてみるとグリフィスが敢えて登山を試みた背景には何か目的があったはずだ。

まずグリフィスと白山との出合いを日記[1]から拾ってみよう。

三月八日(水)。申し分のない天気。遠くの連山は真白に輝いていた。三月十一日(土)。山は光り、ばら色の夕焼け。三月二十九日（水)。雪を頂く山が、褐色の肌もあらわに、青く霞み始めて来た。七月十九日(水)。夕食後、馬で南の方へ行った。西の方に黄金の空に光の大波と火の波紋。東の方は静寂で崇高な連山の濃い紫。黄金に照らされた雲の白い峰。スイスのようだ。八月一日(火)。白山連峰の眺めがすばらしい。月光。

ついでに白山登山後の日記からも引用したい。十一月五日(日)。白山が雪に輝いていた。十一月二十四日(金)。城壁から白山が白く輝いて見えた。十二月十七日(日)。午後、愛宕山の上まで岩淵と散歩をした。すばらしい景色。白山連峰が光っていた。白山、別山、朝日岳。十二月二十日(水)。まるで天国から来たような美しい日。山は汚れのない白いかたまりに見えた。

これで見ると、グリフィスは福井に住むようになってから遠望されるこの白い山にすっかり魅了されてしまったことが分かる。その理由の一つは純白無比の山であること、とくに夕日に映えて光る時とか七月の頃の夕べの連山に静寂と崇高を見出しているのは幼ない頃からのキリスト教信仰にねざしている。一つはスイスのアルプスを連想させることで、(グリフィスは明治二年、ラトガース大学を卒業した年に姉マーガレットと三ヵ月のヨーロッパ旅行をした時、スイスのアルプスに登山した。)米国東部の町に生まれ育ったグリフィスにとってこの時の感動の再現が白い山にあった。[2]〈さてグリフィスには美点といっていい気分がある。それはロマンチシズムであり、その最もよく現われるのは日没への渇仰と旅への憧憬である。…日没の描写は日記の特色の一つであり…(2)船舶のある建物の窓が夕日に染まり、古い教会堂の窓ガラスのように輝いた。…〉

これで分かるようにグリフィスは日本人役人に誘われて白山に登ったのではなく、自ら進んで役人を促しての登山であった。その上特に忘れてならないのは同時代の有名な博物

学者、スイス生れのハーバード大学教授J・アガシの野外調査を倣った科学精神である。すなわち一つは白い山が信心者の山であることを知って、それを自らの足で体験すること、一つはこの山が富士山に次いで日本で二番目に高い山と云われていたが、自らその高さを測定することであった。

ところで外国人による白山登山はグリフィスの明治四年をもって嚆矢とする。しかし昭和六十一年夏、白山登山の福井、石川方面からの登山口としても知られている石川県白峰村を訪ねると、白山に登った最初の外国人は明治七年のドイツ人地理学者のJ・J・ライン[3]であり、次が明治十二年の東京大学のお雇い化学教師の英人R・W・アトキンソンであった。もっともラインが白山で多数の植物を採集して標本となって紹介、また手取川流域でジュラ紀の化石の発見の功績やアトキンソンには「八ヶ岳、白山、立山―夏の旅」のような論文があるが、これらはあくまでも調査、研究を目的の白山登山であってグリフィスの場合は夏休みを利用しての個人体験に他ならない。もっとも藩がその費用を持った。

二　グリフィスの白山登山メモ

それではグリフィスの白山登山はどうだったか。それを知る上で格好の資料を入手することができた。〈これは先生が福井で旅に出た時に日記代わりにポケットにしのばせた小型手帳（一六・五センチ×一〇・〇センチ）[5]であり、記入は羅列式であるが、かえって読者に生々しい実感を与えると思われる。これはグリフィスの母校ラトガース大学の図書館にあるグリフィス・コレクションに所蔵されている。〉そこで筆者はこのメモをもとにグリフィスの白山登山の追体験を試みることを思い立った。昭和六十一年の夏、グリフィスの登山日に合せて計画を立て、「グリフィス先生白山登山百十五周年記念登山」と銘打つことにした。そして鯖江高校で物理を教える龍溪信行先生、武生工業高校の外国人先生ジェラルド・K・レテンダー氏、福井新聞の佐野周一記者、これに関心を持つ者十名のパーティを組んだ。

そこでグリフィス・メモの記録を確かめながら登ってみての感想を述べたい。（なお高さの測定の実験については章を改めて龍溪先生の記述がある。）以下はグリフィス・メモの拙訳である。

明治四年八月二十一日（月）

三時に目が覚めたが、また四時三十分まで寝る。朝食。五時出発。江守に会う。五人パーティに人夫三人。米、綿、大豆、大根、とうもろこし、西瓜、きゅうり。村々に竹、色紙、提灯が飾ってある。二度目の生糸を巻き取っている。暑いので佐平の檜笠をかぶる。涼しい。松岡の役所で休む。永平寺まで四里の石の道標がある。この大きな寺の貫主は明治政府の高官、島津の叔父である。高さ数千フィートの山の村で休む。家の横から入る。戸口は外国人を始めて見る日本人の凝視の目。それが少しわずらわしくて背を向けて食べねばならなかった。谷を行く。山路のつめたい湧き水。山の高い所で炭焼きの煙。高さ十五フィートの滝がしぶきを上げる。涼しい石、しゅろのような広い葉、ひっそりした深い松林が渾然一体となって、実に涼しい風景をなしている。大きな家で、白い歯の娘たちが二十人、たくさんの繭から糸を巻き取り、男が

踏み子でそれを数えていた。約一マイル先の山の端は火山岩になっていて、その下は冷い澄んだ水と、美しい砂。青空の下で泳ぐ。小舟で渡る。勝山に入った。府中ほどの大きさの町。大勢の大人や子供が待っている。あばたの人はほとんどいない。高くて風通しの良い所にある大きな寺で愉快な老僧のもてなしを受けた。二千石の金持ちの家を訪ねた。政府に逆らったかどで、正門が閉っていて、横の門から入った。金魚の池。広い家敷に多くの使用人。西瓜をごちそうになった。町を散歩した。白と赤のタチアオイ、百日紅の赤い花。勝山は六千人。絹とたばこで有名。八月十八日の神社の祭り。角力。絹の反物半斤とたばこの葉を勝山みやげに買う。日本人は紙に金を包んで宿に置いて出る。金をむき出しで支払わない。たばこ工場と二百年の寺。こおろぎが鳴き始めた。もう秋。一般に日本人は西洋人よりも動物にやさしい。しかし時たま、男の子が犬を弓で射たり、槍で刺したり、ぶらさげたり、水に溺れさせたりする。

八月二十二日（火）

四時十分起床。五時三十分出発。山越え、谷越え、スイスの旅を思い出す。九時、山寺で休む。その下の白波の立つ流れの白い丸石を見ていて、このような小石になるのに何百年かかったことか。このあたりの人は異常に失礼と思えるほど外国人を好奇の目で見る。あらゆる所へ登って見ようとする。正午すぎに出発。九里歩く。体力にかかる負担はきびしく、スイス登山よりつらい。霊山までの道は五マイル間隔に祠がある。山小屋があった。日本語の名前や日付がいたる所にあった。「あと一里」、そして長い一里を歩くと、また「あと一里」と人は答える。急流にかかる板の橋を渡り、ようやく客の多い宿に入る。三軒からなる村。いい部屋がとれた。山と飛沫を上げる川。昼食は豆ごはんに青菜のつけもの。入湯。神棚と十本のろうそく。三つの湯舟。佐平と私が帯をしていないので主人が文句を言った。故郷の夢を見た。

八月二十三日（水）

晴。岩淵、江守はのびてしまってもう登らない。気圧計が役に立たないので、寒暖計で湯の温度を測ると華氏二〇六度。一行六人（召使二、案内人一、同行者二）。八時三十分、鳥居の下から登る。二十五名の巡礼が下りてきた。三時三十分に頂上の山小屋に著く。雪渓。老案内人と鋸歯状の岩まで上る。途中、多くの地蔵に祈る。頂上に立派で堅固な神社。金箔の仏像、石の壁。二十九年前、風で倒れた古い神社の跡。小さな緑の池。下界の眺め。虹が二つ。雪渓。雲が天使の群の歓喜のよう。華氏一九五度で沸騰。山の高さを測定。花を摘む。夕食。八時に寝たが、一晩中ほとんどねむれなかった。小屋に約四十人の男。二百人のこともある。雨が降り出した。雨もり、蚤でねむれず。

八月二十四日（木）

風雨。下山、七時。山の姿がちらっと見える。ずぶ漏れの服が重い。ぬかるみで滑ったりころんだりしてひどく疲れた。十時、村の宿に着く。湯に入る。女たちが飛び出して行く。大雨。佐平に身体をもんでもらう。ばら色の夕日。月夜。賽の河原。蚤だらけの山小屋に十ヵ月、老人が一人で住む。悪天気は誰か精進の悪い者がいたからだと言う。

八月二十五日（金）

晴。六時起床。案内人の父親から、あんず、

りんご、とうもろこしを貰う。福井から私の学生二人が訪ねて来たので驚く。十一時四十五分、牛首へ出発。岩根神社、樹齢千六百年の木が大きな石の上に立つ。この石は丸い礫岩である。小さな祠には木像の仏があって、泰澄大師が彫ったという。この坊さんは千年昔、最初に白山に登り、道を切り開いた。牛首村。厚い壁の三、四階建の家がある。冬、貧しい人だけがここに住む。庄屋の立派な家で休む。唐人を見ようと垣根から目がのぞく。色紙に書く。ディケンズを読み、蚊帳に絹ぶとんで寝る。九時。

八月二十六日（土）

雨。六時半出発。雨が激しい。佐平の蓑を借りた。十マイル歩き、九時十五分、谷村で休み、服を乾かす。十時半出発。草履をはく。二里行って、捨て家で休み、草履で足の皮がむけたので靴にかえる。くるぶしまで水が入る。勝山に下りた。三時、駕籠で出発。山に雲がかかり、空は厚い雲。急流に沿って行くと、二人の男が川のなかを指している。乞食が川の少し上流へ歩いて渡ろうとして流れに足を取られて溺れている。流れにほんろうされて転々。その男の笠や褐色の腕が見える。しかし誰もそれを知らぬ顔。岩淵に聞いてもうるさそうに、何でもない様子で通り過ぎる。佐平は笑ってこう云う。乞食の一人ぐらい、日本にはまだ百万といると云う。数マイル先で大野の役人に会う。人々は笠を取り、地面にひざまずく。大野は六千人。大勢の人が通りに並ぶ。まるでローマの凱旋入場のよう。庭の石どうろに明りがまたたき、娘たちが笑い興じている。子供を三、四人連れてきてもらう。夢にE・G・J（恋人のエレン・G・ジョンソン）。

八月二十七日（日）

くもり。五時三十分起床。昨夜の子供、キタロー、クラキチ、ソデマツらが遊びにきた。六時三十分出発。薪を積んだ馬と男女に会う。赤と青に塗った仏像を見た。二マイル駕籠に乗り、十五マイル歩き、大窪という村の大きな酒屋さんの新築の家で休む。

なおグリフィス日記では八月二十一日（月）から八月二十六日（土）までは空白。八月二十七日（日）へ白山から帰った。日本は海のスイスである。田舎の家は、ロビンソン・クルーソー式の建て方である。〉

三　「グリフィス先生白山登山百十五周年記念登山」

このようなテーマでいよ〳〵踏査にかかったが、もともと地質学も生物学も門外漢である上に、登山道もグリフィスの頃と違っていわゆる登山者の道を辿っての実地踏査ということで、とりたてて言うほど学問上の新事実はなかったことを断っておきたい。また登山時のグリフィス一行六名（召使いで料理人の佐平、会計係役人の江守、通訳の岩淵、江守の召使い、（福井の人夫三人に代って）ガイド一人、ポーター二人を雇う）のパーティが物語るようにあくまで登山目的を自分に強いたグリフィスの場合と違って和気あいあいの夏山を歩く気分に満ちていた。しかも全員が佐平らも着けたような檜笠に「グリフィス先生白山登山百十五周年記念登山」と記したのをかぶったのが人目を引いたほどだ。一行の一人、当時のグリフィスより四歳下のハーバード大学出身のレテンダー氏は仲間によく解け込み雰囲気を盛り上げた。しかも氏は禅に造詣が深く、高い山での瞑想を悦びとしていた。

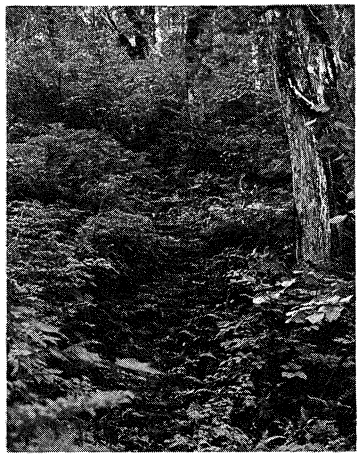
山頂で一人岩の間から坐禅でもしているかのような瞑想の姿が見えた。それにしてもレテンダー氏が高山の岩石や植物に示めす知識に感心させられた。それは福井のグリフィスにも云えることで、米国の教育の基本に浅いが広い知識の修得の伝統が脈々として続いているとの印象を受けたことを記しておきたい。

(1) グリフィスの登山道程について

福井――松岡――勝山(泊)――平泉寺白山禅定道――平岩(泊)――白山頂――山小屋(泊)――市之瀬(泊)――牛首(白峰村)(泊)――大野(泊)――大窪――福井。これで見るとグリフィスは六泊七日の福井滞在で後にも先にもない長い旅行を旅人として新地開拓の好奇心で、同じ所をなるべく避けての道程になっている。平泉寺から白山温泉までの早朝五時三十分出発、昼食後九里の山道はグリフィスにスイス登山より辛い、「あと一里」の合言葉がいつまでも続く耐え難いものだったろう。ようやくの思いで温泉のある三軒だけの人家の村にたどり着く。

翌日、疲れて動けないような江守、岩淵に愛想がつきたグリフィスは市之瀬の強力一家笹木の者を、案内人と食事、寝具、測定器具などの運搬に雇った。そのグリフィスの歩いた登山道だが現在その一部が残っている。それを案内して下さったのが白峰公民館長の神谷喜寛氏であった。昭和六十一年八月二十二日午後六時すぎ小雨のなかを神谷氏の案内で市之瀬から営林道を通り途中から脇道に入った。多少暗い杉林を神谷氏は棒切れで笹藪をたたいて大声で熊に警戒しながら進む。ブナの林に出る。下に急流の音を聞く。その流れの近くにグリフィスも泊った湯の宿があったという。だいぶ暗くなってきたが草のなかの石を埋めた段段道が大きなブナの林に入って行く。しかしその道は二十分ほどで白山釈迦岳に通じる営林道に出て、そこで消えていた。ブナの林にまじって栃の大きな木もあり、カーキ色の皮殻の実がたくさんなっていた。筆者は

(越前名蹟考より)



神谷さんにこの旧道を「グリフィスの道」と呼んでもらえないかと頼んだものだった。

(2) グリフィスの佐平への親愛の気持

〈私の召使の佐平は「宝石」のように貴重な者でこの旅では私の欲求をすべてあらかじめ分かっていて「黄金にまさる」ことを身をもって立証しました。すばらしい夕食を作ってくれたり、疲れた手足をもんでくれました。〉[6] またキリスト教雑誌[7]〈六時間の骨打りと頑張りのあとなので、山小屋に着くと佐平は「もうここで休んで、登るのは明日にしましょう」と云う。しかし私は「いや、明日は雨が降るかも知れない、すぐ行こう」といって、神主の老案内人に付いて、再び疲れた足で登り切った。〉 ここでも佐平はグリフィスの忠実な僕として、グリフィスの疲れた身体を心配しながらも、頂上を窮めてその高さを測定するというグリフィスの目的を思って付いて登っている。手紙によると三十分の休憩をとった最後の登りは体力の酷使であったが、その報いは大きかったと云う。

筆者はこんどのグリフィスを慕う白山登山で、佐平の忠僕ぶりを思わないわけには行かなかった。グリフィスの古典とも云うべきあの著名な The Mikado's Empire 「皇国」(明治九年)のなかに、佐平についての興味ある記述があるが、それは忠実な佐平に報いるため親愛をこめて書かれたのであろうと思われる。

ここでその部分の拙訳を少し引用してみよう。[8]〈佐平は百姓の出ではなかった。東京へ旅をしたことがあった。小者として戦に出たこともあった。頭がよくて人に仕えるのに適していた。職業はかって大工であったから、家のことを手際よくした。釘一本打つにも、花瓶の棚をつけるにも、小さなパリ製の時計を設置するにも、福井の役所の機構を全部動かすのは時間も面倒もかかりすぎる。そういう時、佐平が何でも上手にしてくれたので大いに助かった。佐平は見た目よりも心がきれいであった。陽気で、忠実で、勤勉で、主人思いであり、呼び出しにはすぐ応じるし、子供に対するように気を使う。そして異教徒だけれども、ポープ〔十八世紀イギリスの詩人〕の定義を借りれば、佐平は「神が最も気高く造りたもうたもの」であった。〉

(3) 日本人巡礼とキリスト教国の巡礼の心

グリフィス・メモによると御前峰(二七〇二米)までの途中には多くの石地蔵があり、頂上には立派で堅固な神社と金箔の仏像が石の壁にかこまれてあった。明治初年の神仏分離の宗教政策により白山頂の神祠の仏体の下山が行われ、白峰村などに預託されたのは明治七年のことである。したがってグリフィスの見た奥宮はまだ神仏混淆のままであったと思われる。話は飛ぶが筆者は今度の旅でグリフィスが勝山で泊った[9]〈高くて風通しの良い所にある大きな寺で愉快な老僧のもてなしを受けた〉とおぼしき寺を訪ねていた。それは勝山市沢の義宣寺(永平寺派)という禅寺である。勝山で一番高い所にあり、年中風通しが良く、明治の初めに説教の上手な僧がいたという。紫田義宣のために建てられた大きな古い御堂に入る。おもしろいことに仏壇の前に神社に置かれる阿吽の狛犬があった。

御堂はグリフィスの測定によれば八フィート[10]平方で高さ十フィートであった。〈召使い

が祈り、賽銭をあげて仏像に聖水をかけたあと、このような地上の高い所でグリフィスは「天にまします神に感謝し、御名をあがめる」と祈り、天にまします神がそしてイエス・キリストまでがすべての人に「この夏からは汝ら祈れ」、神官も偶像も賽銭もむなしい祈りのくりかえしも無い、ただ祈れといわれた。〉と書いた。

霊山白山を登る仏教国の巡礼（ピルグリム）とキリスト教国の巡礼の祈りの有り様が極端に対照的に示めされているではないか。グリフィスの知りたいことはそこであった。すなわち地上で最も高い所の一つにまでも日本人の力強い偶像信仰の姿を見たことである。しかも幸いよく晴れて雲の天使の群が歓喜しているようであった。

(4) 外国人が日本の山の高さを知ろうとする考え

それは午後四時半を過ぎていただろう。山頂での高さの測定が始まった。福井の学校から外国製の器具を運んでの装置である。グリフィス・メモに華氏一九五度で沸騰とある。また姉への手紙でもグリフィスは岩のかげに身を隠して、風よけに毛布を使って水の沸騰点を測ると、それは一九五度であった。

それより百十五年後、物理の龍溪先生の実験が始まった。パーティ全員が固唾をのんで見守っている。結果は先生の目盛を読んでの報告で正に華氏一九五度だ。感動。筆者はグリフィスのことを思ってレテンダー氏のところへ飛ぶように行ってそのことを告げ強く握手をした。

それにしても外国人が日本の山の高さに興味をもってそれを測定したのはなにもグリフィスのみでなく、他にも例がある。その一人がグリフィスの友人でラトガース・カレッジの同輩のエドワード・W・クラーク（一八四九―一九〇七）である。クラークはグリフィスの紹介で静岡藩に雇われて静岡学問所の理化学教師として明治四年十月に来日した。クラークが富士山で高さの測定をしたのは明治六年九月十六日～十七日のことであった。案内人に高さ測定の器具をかつがせて、日本人学生一人をつれて静岡を出て二十四時間内で山頂に立つという離れ業をなし遂げたが、もう二度とやりたくないと言わせたほど必死の登山だったようだ。頂上近くで同行の二人はついに寒さと疲労で落後してしまった。頂上で山の高さを測ろうとしてもすでに日はおそく止むえずその場で測定しなければならなかった。〈[11]気圧計は二〇・五〇インチの少し上を示したから、高さ一一、〇〇〇フィートぐらいだろう。寒暖計は蔭になった所で五十五度（華氏）であった（頂上はここよりはるかに寒い）。私は噴火口から下の自分の位置まで距離を見積って、富士山は高さ一一、五六〇フィート強との結論に達した。その後のくわしい調査によると私の測定の結果はほとんど間違っていなかった。〉

四　登山の満足な結果

白山から福井にもどった翌日グリフィスは早速学校へ行って九月四日から始まる授業に備えている。登山の苦労や疲れとか身体の痛みなどの愚痴は一言も日記に見えない。その代りに日記にもある夏の登山を思い出すような月の夜の白山連峰や域壁から見る白く輝く晩秋の白山を忘れずに記している。グリフィスの白山登山は成功であった。姉への手紙で、

計画したとおりの結果が得られたと知り、大いに満足しましたと書いているが、それもグリフィスの体力・精神力と熱意のしからしむるところであった。グリフィスとてこの登山がどんなにか苦しかったか、今日の比ではない。〈私はこの景色を一生忘れません。旅と登山の苦しみとそれにともなう疲れと難儀がいっぺんに癒されました。〉[12]それは日記に書いた福井から見た夕日に映える白山に今度は苦労して頂上に来て好きな夕方の広大な景色に身を置くことが出来たのだからグリフィスにとってこんな感激はない。

〈虹がキラキラ輝いて東の空に三つ懸った。その端が峰に支えられていて、まるで高い所からこちらの休息所（下界）を覗んでいるように思われた。火のような赤とこげ茶の雲海の中にかくれる落日は最後の審判の日の畏怖すべき始まりに思えた。この虹と恐るべき薄闇の空間に太陽光線が水平に射してきて、天国の虹の門に向って進む凱旋軍のような銀色に輝く雲の群の中へと入っていた。強力な風に吹かれ、永遠の静寂にそびえる不変の峰々、頂上の崩壊も露わな、中程と麓の森林の繁茂した古い火山が、今、すばらしい景色の空の下で休息の眠りについている。〉[13]これは自然の神秘と、宗教の関係を美文調でとらえたグリフィス特有の描写である。白山の旅についてはまず最初に姉マーガレットへ、八月二十八日の夜、長い手紙を書いているが、あと興味ある内容というと、山小屋で蚤に悩まされて眠れなかったことだろう。〈横になったが眠くならない。コーヒーを飲んだので目が冴えているのだと思った。ところが明くる日になって二〇〇箇所も赤くさされた所があるのが分かってやっと眠れぬ理由がわかった。〉雨もりもあってその夜は一時間ぐらいしか眠っていない。このことはまた「白山と海のスイス」（ザ・クリスチャン・インテリジェンサー）の記事にも次のように報告がある。〈山小屋では一睡もしない。巡礼と蚤がいつも一所にいる。はじめは何か病気に見舞われたのかと思う。眠ろうとしても眠れない。まさかこんな虫がいようとは疑ってもみなかった。明くる日、一〇〇以上の赤い痕跡を身体に見つけて、眠れなかった事実がはっきりした。〉グリフィスの記録で山小屋の巡礼がメモには四〇人、「皇国」での記事には二〇人とあったり、蚤のさした跡が手紙では二〇〇、記事には一〇〇ぐらいになっているのは少し気になるが、そこは大目に見るとしよう。これほど一晩中悩まされた蚤であるが、すぐその後に続けてこんなユーモラスなことを言っている。〈それでも前方が見えないぐらいひどい雨に滑りやすい道を下りながら、どうしても不思議だったのは一年の寒い十ヵ月、巡礼も来ず、雪ばかりの所で、この貪欲な生き物は食うものも、飲むものもなしにどうしてやって行けるのかということだった。〉

巡礼とは野中至が名著「富士案内」（春陽堂 明治三十八）で書いている〈白衣の信徒〉と考えてよかろう。八時半出発のグリフィスら六名のパーティは登山の途中、おそらく七時頃下山を始めた二十五名の巡礼の群と行き交っている。しかしグリフィスの書いたものに彼等の装束や印象についてのくわしい記録が見あたらない。しかし次の記事はおもしろい。〈巡礼は日本各地から、特に近郷近在からやって来て、退屈な山道を登り、家路につく。その時、よく登った、そして阿弥陀[14]

仏のおかげにあずからせてもらったという印に栂の木の枝や小さな杉の木を持って帰る。（中略）白山は神聖である。召使は身体から皮と鉄製のものをすっかり捨ててしまう。二日前の食事で鳥肉が食べたいと言うと、佐平にがまんしてくれと頼まれた。というのは今度の山登りまでの七日間は生き物の血を流したくないからと言う。けれども私は不信心だがどうしても皮靴をはき、小型ナイフ持参で出発した。〉

グリフィスの白山登山の収穫の主なものは、一つはその高さの測定であり、もう一つは白山と日本人の信仰であった。そして前者は「皇国」を中心に後者は「ザ・クリスチャン・インテリジェンサー」に発表した。もちろんこれまで述べたような旅の途中の見聞とその感想、山頂の感動などグリフィスにとって得難い体験であり、心に深く刻みこまれた内面的な事柄であった。

ところで「皇国」ではこの白山の体験の記述は意外に簡単で平凡なものである。しかしここで重要なのは、グリフィスは白山に登った最初の外国人であること。寒暖計だけの不完全な測定だが高さ九、三二〇フィートを明確に記述したことである。〈[15]とにかくフンボルト氏が、さらにこの沿岸の日本人までが、白山は富士山より高いと推測していたのがこれで決着がついた。〉アレキサンダー・フォン・フンボルト（一七六九―一八五九）はドイツの科学者で著述家。その著「コスモス」をラトガース・カレッジの学生の頃にグリフィスは読んでいた。「ジャパン・デイリー・ヘラルド」紙によれば〈日本で富士山の次に高い山は加賀・越前の「白山」（白山）で、ザ・インディペンデント紙の通信員ウィリアム・E・グリフィス教授が一八七一年八月の初登山で高さを九、二〇〇フィートであると計算した。〉グリフィス自身はまた「ジオグラフィカル・ノート」[16]でも次のような記事を書いている。〈日本で富士山の次に高い山は白山（しろやま White Mountain, Mont Blanc）である。西岸に近い越前・加賀の国に位置する。それは山脈のなかの一つで、富士山のように死火山である。それは神聖な山で年に数千人の巡礼が登る。筆者は白山に登った最初の外国人である。そしてその高さを測かり、例の方法で九、二〇〇フィートと推定した。もっと完全な器具で測れば二～三〇〇フィートの誤差が出るかも知れない。日本の大きな山はほとんど死火山であるが、ときたま活動する山が少しある。白山は一年の約八ヵ月を雪でおおわれる。夏でも雪の白い縞がつく。富士山のように晴れた日は一〇〇マイル以上も遠くから見える。それほど日本の空気は澄んでいる。この登山と測定の前までは白山はその地方の人や外国人には、富士山より高いと思われていた。〉このことで筆者はグリフィスのすべての仕事が精密で信頼すべき性質のものであることを確信できた。このような人をもっと尊敬と感謝をこめて世に知らせる責任がある。さすがに他の多くのお雇い外国人の比ではない。なんといってもラトガース・カレッジやニュー・ブランズウィック神学校の見識を知らねばならない。ここで教えるすぐれた精神が神に代って（とあえて言いたい）選んだ人物であった。どうしても意志の強い人、観察が正確な人、好奇心の強い人、記録を重んずる人、勇気のある人、精力と熱意のある人という良い面の

印象をあげないわけにはいかない。

〈日本を海のスイスと呼んでも行き過ぎにならないと思うくらいにたくさん見て一行は無事に福井へ帰ってきた。元気をとりもどして授業を再開したが、うれしいことに学生の大多数（以前から蘭書をすらすらと簡単に読んできた外科医の卵から、くりくり目のちょんまげを結った十四歳の少年まで）が礼儀やていねいな挨拶を英語のいろんな表現を使って教師の私の耳を喜ばせ、心を楽しませてくれた。そして彼等はキリスト教の希望と真理を信じる国の科学を学ぼうと熱心に努力しているように見える。我々書き手に最も興味があり、「ザ・インテリジェンサー」の読者がおそらく最も聞きたいことはこの手紙では何も書かない。けれども我々は置かれている微妙な立場を忘れてはいけない。それは日本人はまだローマ（ローマカトリック教のこと）の悪巧みとプロテスタントのキリスト教の相違を知らない。あたり前のことだが日本人の住む所はニューヨークではない。だからそこで昨年七月十二日に何があったなど知るわけがない。しかし日本のために喜ばしい良き時の来るよう多くの作用が今、働いている。そのうち日本の人々と支配者はまがいの宗教の巧妙な狂信者（ローマカトリック教徒）と聖書を翻訳し、日本の政治に干渉しない、またカトリックのように告解場で弱い心を慰める必要のない純潔な家族の宣教師との相違が分かってくるだろう。最後に我々としては蛇のように聡く、同時に鳩のように柔和になることを忘れてはいけない。〉

日本通信の一つとしてのこの「白山と海のスイス」という論文で、いったいグリフィスは何を伝えたかったのだろう。「ザ・インテリジェンサー」の日本通信員としての仕事はおそらく読者が真に知りたがっている古来の日本についての知識と変りつつある日本の有様の提供だろう。「白山と海のスイス」の目的は地理、科学、宗教の面からの新しいニュースであった。すなわち白山の高さの測定という科学上の新知識、日本人の本来の信仰のなかでカトリックの旧教もプロテスタントの新教の相違も分からない日本人にキリスト教布教、蘭学から英学への移行、そしてキリスト教国の科学への福井の学校の若き日本人の関心などを書き送った。

それにしても「海のスイス」という言葉のなんと新しい感覚であることか。日本人でこのように日本をとらえた者はいないばかりか、外国人にもないと思われる。スイスはウィーン会議（一八一四―一八一五）以後、永世中立の共和国であった。グリフィスは西欧の旅で、山岳国スイスの自然美を堪能していた。その視野からグリフィスは日本が頂上に神社をもつ白山（モン・ブラン）が中心の海にかこまれた美しい国という意味で「海のスイス」と表現しないわけにはいかなかったのだろう。

注

(1) 山下英一著「グリフィスと福井」（福井県郷土新書5　昭和五十四年）から“Journals of William Elliot Griffis-The Fukui Journal 1871－1872”を参考。

(2) 拙論「グリフィスの読書習慣が日本での仕事に与えた影響」（「ザ・ヤトイ」思文閣出版　昭和六十二年）所収。頁一〇四。

(3) 久保信一著「J・J・ラインと白山」（石川郷土史学会々誌　第十一号　昭和五十三年）。

(4) “The Transactions of the Asiatic Society of Japan” vol. Ⅷ pp. 1－58

Yokohama, 1880.

(5) 山下英一著「グリフィス先生越前豆日記」緑の笛豆本　第五十二期第二〇六集　昭和六十年)。頁十六―十七。

(6) グリフィスが姉マーガレットに出した白山登山の旅の手紙　明治四年八月二十八日付。山下英一編"Letters of William Elliot Griffis―The Fukui Letters 1871―1872"頁八四に所収。

(7) "The Christian Intelligencer"に掲載のHakusan and the Ocean Switzerland 明治四年九月十八日付。グリフィスはこの雑誌の日本通信員であった。

(8) グリフィス著・山下英一訳「明治日本体験記」(平凡社東洋文庫四三〇　昭和五十九年)頁一四一。原文は"The Mikado's Empire"第二部第九章"Life in a Japanese House"頁四四二―四六。

(9) 本論文　頁七。

(10) 前掲書(7)の記事。

(11) Edward Warren Clark:"Life and Adventure in Japan"1878, American Tract Society, New York.　P. 121。

(12) 前掲書(6)の英文手紙　頁九〇。

(13) 前掲書(6)の英文手紙　頁九〇。

(14) 前掲書(7)の記事。

(15) 前掲書(8)の訳書　頁二三七。原文　頁五三〇。

(16) Alexander von Humboldt:"Kosmos"Vol. V. p. 352 1860. Harper's Edition.前掲書(2)頁一〇七。

(17) "The Japan Daily Herald"ラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵。

(18) "Geographical Notes"(17)に同じ。

参考

福井新聞「白山にグリフィスの足跡追う」昭和六十一年九月一日号